

【問題一】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

新橋行きの東海道線の三等車中で、三四郎はベーコンの論文集を読み始めた。しかし、昨夜名古屋で同宿した色の黒い女から発せられた「あなたは余つ程度胸のない方ですね」という大胆な一言で動揺しており、心はうわの空であった。

三四郎はベーコンの二十三頁を開いた。他の本でも読めさうにはない。ましてベーコン杯は無論読む気にならない。けれども三四郎はウヤウヤしく二十三頁を開いて、万般なく頁全体を見廻してゐた。三四郎は二十三頁の前で「応昨夜の御淡をする気である。」

しかし、結局、三四郎はベーコンをあきらめて、色の黒い女のことを思い返したり、筋向かいに座った髭の男の様子を観察したりしていたが、再び何か読もうとする。

外の小説でも出して、本気に読んで見様とも考へたが面倒だから、已めにした。それよりは前にゐる人の新聞を借りたくなつた。生憎前の人はぐうぐう寝てゐる。三四郎は手を延ばして新聞に手を掛けながら、わざと「御明きですか」と髭のある男に聞いた。男は平気な顔で「明いてるでせう。御読みなさい」と云つた。新聞を手にとつた三四郎の方は却つて平気でなかつた。

開けて見ると新聞には別に見る程の事も載つてゐない。一二分で通読して仕舞つた。

明治四一年の東海道線車中でのこのような三四郎の読書行動は、現在の我々にとってはことさらに注目する必要もないほどありふれた日常的な光景である。だが、三四郎という一人の車中読者を通して象徴的に表わされているのは、近代になってはじめて誕生してきた鉄道と読書実践との密接な関係性のありようである。

明治以降の近代交通機関の急速な発達、出版流通や人々の読書生活に急激な変化をもたらした。特に鉄道網の全国的な拡大は、一方において活字メディアの全国的な流通網の形成を可能にしたばかりでなく、他方において、鉄道のネットワークに乗って全国的規模で車中読書文化という新たな読書文化を創出した。すなわち、鉄道は活字メディアを運ぶメディアであつたばかりでなく、それ自体が読書の場としての機能した。近代の読書史を近代以前から分かつ重要な要素として、鉄道の影響力がまず第一にあげられねばならない。

近世においても、大名等は駕籠の中で小型の本を読みながら、街道を揺られて旅したともいわれているが、大部分の旅人は自らの脚で歩いて旅していた。

車中空間での読書、移動しながら読むという快楽は、近代の交通機関の登場によって初めて可能になつたきわめて近代的な経験である。

ところで、読書の場として見た場合、鉄道に代表される公共交通機関は基本的に不特定多数に開かれた空間である。そこでは、乗客の読書習慣は図書館の場合のように規制されることはなく、自由放任の状態に任されており、さまざまな読者のさまざまな読書習慣が互いに出会い、交サクし、衝突を繰り返していた。そして、その衝突のつづの中から新たな読書習慣が形成されてくる。車中読書を経験することによって、人々の読書習慣はどのような変容を遂げたのであろうか。

ヨーロッパにおける車中読書の発生について、W・シヴェルプシュは馬車旅行から鉄道旅行への移行と関連づけて説明している。すなわち、長時間にわたる馬車旅行は旅行仲間との談笑や親密な触れ合いを特徴としていたが、鉄道旅行においては短時間での乗客の入れ替わりや、高速度による窓外の風景との隔絶によって、乗客相互の会話や談笑が消失し、その代用として登場してきたのが車中読書であつた。こうして、一九世紀半ばに、車中読書は鉄道旅行の必須のものとして定着するようになる。

鉄道という新しい輸送方法が、旅行者相互の関係をかくも深く変えてしまつたあとでは、いずれにせよ読書は、鉄道旅行における最も自然な営みとして残るであらう。(W・シヴェルプシュ、加藤二郎訳『鉄道旅行の歴史―19世紀における空間と時間の工業化―一九八八)

しかし、日本においては、鉄道旅行は馬車旅行のような直接の先行者を持つてはいない。むしろ、鉄道は明治初期に人力車・乗合馬車・汽船といった他の交通機関とほぼ同時に導入された。そして、注目されるのは、鉄道のみならず、すでにこれらのさまざまな交通機関において車中読書が原初的に発生してきている点である。近代日本の車中読書はまず明治初年代の人力車中において誕生して来る。

明治初期において、人々の最も身近で日常的な乗り物となつてゐたのは人力車であつた。人力車は明治三年に東京府の許可を受けて初めて市街に登場してきたが、またたく間に爆発的な普及をみせ、翌年には東京府だけで人力車台数は一万台を突破し、各府県においてもその普及ぶりは目覚ましかった。その結果、全国的人力車台数は明治八年には一万台、明治十五年には一七万台に達している。

ところで、当時の道路の状態はきわめて悪く、しかも人力車の車輪は木製車輪に鉄輪を巻いて出来ており、そのため震動が激しくて決して乗り心地のいい車ではなかつた。にもかかわらず、人々は人力車を新たな読書の場として活用し始めている。当時の人力車中での読書光景の例を拾つてみよう。

長野県のお官員で村松秀茂さんといふお方は新聞が大好でお勤めの外三飯と沐浴と寝臥間を除く他人と対話をするにも演劇遊山物見に行にも新聞紙を持て間隙さへあれば出して読み彼冠の落るも知らず麦の流る、も知らずといふに同じく先頃或る所へ出役へ人力車の上にて例の如く新聞を讀で居て一

里半も先へ通り越て気が着たさうです（仮名読）明八・一一・五）

この記事で注目されるのは、新しく登場してきた新聞というメディアと人力車との組み合わせである。両者ともに明治以降新しく普及し始めた文物であり、人力車中で新聞を読む読書光景は、読書の領域における文明開化を可視的に表わすものであった。

また、人力車中で読書にハゲんでいいる人物が官吏である点も注目される。明治初期にあって官吏は教員と並んで代表的な読書階層であり、かつ経済的にも人力車を利用できる余裕のある人々であった。記事で紹介されている村松氏という地方官吏はとりわけ大変な読書家であったようで、記事の後段によれば、彼は人力車中で新聞に読みふけるばかりでなく、

又諸新聞が二日分も溜ると徹夜で読む其種類は日々新聞、報知、真事誌、朝野、あけぼの、横浜、絵入、評論、明六、報四、甲府、信飛、新潟、日新録、其外福沢さんの文明論だの学問の勧めだのといふやうな新刻の著訳書は必然読むとお話し（後略）

中央・地方の大新聞・小新聞から『明六雑誌』や福沢諭吉の著書まで、この地方官吏の読書量は相当なものである。文明開化の思潮が活字メディアを通じて地方へ伝播していく過程で、このような地方知識人層は重要な位置を占めており、彼らがまず人力車での車中読書を誕生させる担い手となった。

人力車中での新聞読書が普及するにつれて、車夫の側でも乗客サービスのために積極的に新聞を車中に備え付けるようになる。

此せつ東京うちを曳く四五両の人力車は中へ仮名つき新聞を二三枚も置いて曳ながら客に読ませるので追追この類が殖ます（『読売』明一一・六・二五）

ところで、人力車という車中空間は基本的に乗客一人もしくは二人と車夫からなる閉ざされた個人的な空間であり、不特定多数に開かれた乗り合い型の汽車とは異なっている。現在のタクシードライバーの車内空間との類似を想起することもできる。したがって、明治初期に一般的に広く行なわれていた音読の方法で乗客が新聞を読むとき、それを聞かされるのは車夫である。すなわち、人力車中での読書はときとして、乗客から車夫への読み聞かせと化すことが往々にしてあった。逆に、車夫の側から読み聞かせを積極的に頼むケースさえあった。

大阪府下長堀橋北詰角人力張場の車夫村田平吉（二十三）は朝日新聞大坂新聞を買って乗車する客には車の上に読でもらひ夫を聞のを楽しみ曳歩行心に解せぬ所は途中ながら疑問をして訳が解ると丁寧に礼辞を述て分れると言ます（『安都満』明一二・九・二〇）

明治期の人力車夫という職業は、没落士族からスラム街の貧キユウ層までさまざまな階層の人々が日銭稼ぎのために流入してくる吹き溜まりのような職業であった。そして、社会の最下層とみなされていた人力車夫が、仕事の合間に読書している光景がしばしば人々の耳目をひきつけている。

先日人形町辺を通りましたら或る人力車曳が貴社の新聞を読で居りましたが実に私は感心しました（『読売』明八・六・二）

近來では人力車夫が傍訓新聞を読むの多くその効能も少しは頭はれ以前ほど酒手をねだり亦是増の賃銭喧嘩を為る者もまれなる内（後略）（『花の都女』明九・六・二六）

「新聞を読む車夫」という存在が人々の注目を浴び、文明開化の進展を象徴する指標として賞賛されている。宮武外骨によれば、読み書きのできない車夫までが、乗客獲得のために新聞を読むふりをするこさえたという。人力車の乗客は開化のメディアである新聞を読み、車夫もまた休憩時に新聞を読む。このような読書光景が明治初年代に誕生してきた。それは、新聞と人力車という新しいメディアの組み合わせによって初めて可能になった新しい読書文化の誕生であった。

しかし、人力車中における読書のあり方は基本的に乗客対車夫という閉ざされたコミュニケーションの上に成り立っており、そこには複数の乗客による読書習慣の衝突といった事態はまた生じていなかった。

永嶺重敏、読書国民の誕生 近代日本の活字メディアと読書文化、講談社

問一 傍線部（一）～（五）のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|------------|------|------|------|------|
| （一） ウヤウヤしく | ① 敬老 | ② 馴致 | ③ 最初 | ④ 恭順 |
| （二） 万ベン | ① 遍歴 | ② 偏差 | ③ 編集 | ④ 返礼 |
| （三） 交サク | ① 強迫 | ② 掘削 | ③ 策定 | ④ 錯視 |
| （四） ハゲんでい | ① 努力 | ② 励行 | ③ 勉強 | ④ 奮闘 |
| （五） 貧キユウ層 | ① 究極 | ② 無給 | ③ 窮鼠 | ④ 要求 |

問二 傍線部A「三四郎」について、以下の各設問に答えなさい。

設問一 「三四郎」の作者として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 森鷗外 ② 夏目漱石 ③ 島崎藤村 ④ 芥川龍之介

設問二 「三四郎」を含む「三部作」の組み合わせとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「三四郎」・「羅生門」・「杜子春」 ② 「三四郎」・「舞姫」・「うたかたの記」
③ 「三四郎」・「破戒」・「夜明け前」 ④ 「三四郎」・「それから」・「母」

問三 傍線部B「三四郎の方は却って平気でなかつた」の理由を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 三四郎は本気で新聞を読みたいと思っていた訳ではなかったが、髭のある男に新聞を拝借することをたずねたところ、「お読みなさい」と言われてしまい、むしろ読まねばならなくなってしまったから。
② 車中でペーコンの論文を読むための集中力を維持できなくなってしまった三四郎は、気軽に新聞を読みたいと思ったが、その新聞の持ち主は寝ていたために許可を得ず手に入れてしまったから。
③ 三四郎にはペーコンの論文以外に小説などの書籍を持っていたが、電車の中で書籍を読むという習慣が成立していなかった当時の社会的な環境であつたため、新聞を読むことにも躊躇されたから。
④ 三四郎はどうしても読みたいと思った新聞を電車の車中で読むことの了解を前に座っていた髭のある男から得たものの、この三四郎の特異な言動が周囲の人々から奇異の目で見られたから。

5

問四 傍線部C「新たな読書文化」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 電車の車中において見知らぬ者が互いに新聞を共有するという、明治の新聞というメディアと読者との新しい文化ということ。
② 鉄道の発達以前から行われていた車中において読書するという文化は、鉄道網の発達によって衰退の一途をたどったということ。
③ 鉄道網の拡大によって活字メディアが流通しただけでなく、その鉄道そのものが車中での読書の場として機能したということ。
④ 新たな読書層を獲得するためには活字メディアの発達とその流通網が必要不可欠であり、その流通網を鉄道が担ったということ。

問五 傍線部D「車中読書は鉄道旅行の必須のものとして定着するようになる」の理由を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 鉄道に代表される公共交通機関は基本的に不特定多数に開かれた空間であり、そこには乗客相互に尊重の精神が求められるため、ほかの乗客との衝突を避けるために「車中読書」という新しい習慣が不可欠のものとして成立するようになったから。
② 鉄道での移動時における読書は、図書館での読書のように静肅さを求められることなく自由放任の状態に任されていたため、従来とは異なる新しい読書層が開拓されたことにより、近代的な読者が成立した重要な段階として評価すべきであるから。
③ ヨーロッパにおいて、鉄道での移動はそれ以前の馬車での移動と比較すると短時間で客の入れ替わりがあり、高速による意外の風景との隔絶によって乗客相互の会話や談笑が消滅し、それらの代用として「車中読書」が登場することになったから。
④ 長距離の移動手段としてはまだ十分に発達していなかった当時のヨーロッパの鉄道においては乗客が短時間で入れ替わるため、長距離の馬車旅行とは異なる読書習慣が成立したが、それが後の長距離の鉄道旅行においても引き継がれることになったから。

問六 傍線部E「日本においては、鉄道旅行は馬車旅行のような直接の先行者を持つてはいない」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 日本の社会では鉄道旅行以前には大名等の駕籠での移動が読書する旅行者に過ぎなかった、ということ。
② 近世における旅行者は自らの脚であるく旅行者であり、近代的な旅行者は存在していなかった、ということ。
③ 日本における鉄道の導入は明治初期になってからであり、鉄道以前は人力車での移動しか手段がなかった、ということ。
④ ヨーロッパにおける馬車から鉄道といった交通機関の移行の歴史がなく、近代の交通機関がほぼ同時に導入された、ということ。

問七 傍線部F「読書の領域における文明開化を可視的に表わすもの」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 明治に導入された新聞と人力車という新しい文物について、その人力車中でその新聞を読むという新しい光景が生じたということ。
② 人力車を利用することができた経済的に恵まれた官吏や教員という富裕層が、そもそも代表的な読書階層であつたということ。
③ 人力車中において読書をするという新しい文化が、新聞という新しいメディアによって紹介され普及したということ。
④ 日本では人力車とほぼ同時期に鉄道での移動における「車中読書」という文明的な行為が一般化したということ。

6

問八 傍線部G「人力車中での新聞読書」の特徴として不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 文明開化の思潮が活字メディアを介して伝播される上で最も重要な地方知識人層を拡大した点。
- ② 人力車での車中読書を誕生させた担い手は、経済的にも余裕のある読書階層であったという点。
- ③ 人力車という車中空間は基本的には閉ざされた個人的な空間で、乗り合い型の汽車の車中空間とは異なっている点。
- ④ 人力車中での新聞読書の形態は、その空間的な状況から、明治初期に一般的であった音読的方法が行われていた点。

問九 傍線部H「閉ざされたコミュニケーション」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 明治期の代表的な読書層が人力車中に持ち込んだ大量の新聞・雑誌を媒介とする情報伝達ということ。
- ② 明治期の富裕層が人力車を利用することによってその車夫が新たな新聞の読書層となったということ。
- ③ 人力車の車夫とその乗客という限定された人間関係における新聞をめぐる読書の在り方ということ。
- ④ 「新聞を読む車夫」という新しい社会の階層の中で行われたとても狭い読書文化の世界ということ。

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

- イ 三四郎の東海道線の三等車における読書の光景は、当時の読書文化においては極めて特殊な例であったといえる。
- ロ 全国的に拡大した鉄道網によって、活字メディアの全国的な流通が可能になり、かつ、鉄道の車中での読書文化が創出された。
- ハ 車中空間での読書、移動しながら読むという快楽は、近代の交通機関の登場によってもたらされた近代的な経験であるといえるが、その嚆矢は馬車旅行において生じた不特定多数に開かれた空間の成立と無関係ではない。
- ニ 日本における人力車中で新聞を読む光景は、ヨーロッパにおける馬車旅行における読書文化の流入によってもたらされたものであったが、その後、電車の車中読書の流行は日本における極めて特徴的な展開であったといえる。

【問題二】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

コロナ禍、ロックダウンで外出もままならぬ不安な中で、あるヨーロッパ出身の経済学者が一人自宅で再読し、心を癒されていたのは谷崎潤一郎の長編小説『細雪』だった、とさきごろ見た新聞にありました。ルクセンブルク所得研究センター上級研究員、ニューヨーク市立大学大学院センター客員大学院教授を務めるブランコ・ミラノヴィッチでした。

谷崎潤一郎の『細雪』をコロナ下で再読しました。四姉妹の日常の描写に心を奪われました。

谷崎は自らの死後五十五年を過ぎて自分の小説がそのような形で読まれようとは、疫災下の異国の経済学者の心を癒すことになるとは、夢にも思わなかったでしょうが、古典となるのはそういう作品なのでしょう。

もっと直截にこの状況下で多くの人が何かの答えを求めて読んだのは、カミュの『ペスト』でした。かく言う私も高校生のころ読んだこの本を、二〇二一年の秋、四十年ぶりに再読しました。ただし、かつては字面を追っていただけで、ほとんどその内容を理解できていなかったことを痛感しました。それでもあのとき読んだ意味があるとすれば、今になってもう一度読んでみようという気持ちにさせてくれたことです。あの時読んでいなければ、今回この本を読もうとは思わなかったに違いないからです。二度読む価値のない本は一度読む価値もない、という言葉思い出します。

イタリアの作家イタロ・カルヴィーノの『なぜ古典を読むのか』に、このような一節があります。

大人になってからも、若い時に読んだ本の中で最も重要なものを、人生のある時間に、もう一度読んでみるのが大切だ。たとえ本は昔のままで、読む方は確実に変化しているし、そのときの出会いとは全く新しい出来事なのだから。

『ペスト』は、アルジェリアのオランという都市を舞台にそこで蔓延したペストと向き合い、これと闘う人々を描いた群像劇といえますが、一面ではかなり哲学的な小説です。主人公はこの市の医師リウー。海に面したこの町で、ネズミがバタバタと死にだすところからこの物語は始まります。ネズミの死骸が街にあふれだし、間もなく災ヤクは人間に及んでいきます。日一日と多くの人が熱病で命を失い、市は外部と遮断され、交通も遮断されます。流行が始まる直前に、リウーはたまたま結婚を思う妻を市外の山の上の療養所へ送り出していました。駅のプラットホームで別れた夫婦は、以来手紙のやりとりしかできなくなります。医師リウーはその後、治療の最前線に戦うことになりました。彼の周囲には新しい友人や古い友人、年老いた患者などさまざまな人がおり、それぞれのやりかたでペストと向き合います。

そのうちの一人、市民に尊敬されていた神父バヌルーは、教会での講話でこの疫病は神が不信心な人々に与えた試練であると説きました。この説教は街の人々に「自分たちは何か知らない罪を犯した罰として、想像を絶した監禁状態に服させられているのだ」という観念を感じさせたのでした。真面目で清^②レンなバヌルー神父は、多くの心ある人たちとともに、病人の隔離や介護のボランティアに志願し、献身的に働きました。しかし、予審判事オトンの

幼い子どもが隔離された状態で家族に見守られることもなく、苦しみながら命を落としていったさまをリウーたちとともに介護にあたりながら目の当たりにします。何の罪もない子どもまでが、なぜここまで苦しんで死んでいかないといけないのか。これもまた神が人間に与えた罰なのか。深い信仰をもたないリウーでもやはりショックを受けました。

「まったく、あの子だけは、少なくとも罪のない者でした。あなたもそれはご存じのはずです！」

普段、冷静沈着なリウーですが、このときはかりはバヌルー神父に感情をぶつけました。少し間を置いてバヌルーは、「どうして私にあんな怒ったようないい方をなさったのです」と声を掛けました。「私だって、あの光景は見るに忍びなかったのですよ。リウーは「ほんとに、そうでした」「悪く思わないうでください」と詫言いました。バヌルーは言います。「まったく憤りたくなるようなことです。しかしそれはつまり我々の尺度を越えたことだからです。しかし恐らく我々は自分たちに理解できないことを愛さねばならないのです」。

リウーは反発します。「そんなことはありません。僕は愛というものをずっと違ったふうに考えています。総じて、子どもたちが責めさいなまれるように作られた世界を愛することなど死んでも認められません。二人の見解は相違します。でもリウーは「我々は一緒に働いているんです。冒瀆や祈禱を越えて我々を結びつける何ものかのために。それだけが重要な点です」と述べます。バヌルーはこの言葉に感動し、「そうです。あなたもまた人類の救済のために働いていられるのです」。この言葉にリウーは、人類の救済などと大袈裟なこと、大それたことは考えていませんと言いい、「人間の健康ということが僕の関心なんです。まず第一に健康です」。

二人はついに信仰の壁を越えることはできませんでしたが、でもリウーが最後に言うように一緒になって死と不幸と戦っていたのです。

神父はその後も教会で「すべてを、子どもの死さえも、神の御心に任せ、個人の力に頼るうなど」としないうように」と説教しました。その彼がベストに感染するのです。彼は熱病の中で、主義に反するからといって診察を拒みました。それでものちには「医者が必要はないが、規則通りにするために」自分を病院へ運ぶことに同意しました。これはカイ抱してくれる宿の女主人に感染させてしまうのを避けるためだったのでしょうか。診察したリウーは「僕がついてあげますよ」と声を掛けますが、神父は苦しみの中で「ありがとう」と言いながら「しかし修道士には友というものはありません。すべてを神に捧げた身ですから」と言って十字架を握りしめるのです。翌朝、彼が死んでいるのが発見されました。彼は、自分の主張を一貫して守ったのでしょうか。その点、聖職者としては立派でした。

しかしリウーは別の場面で新しくできた友人タルーに「あなたは神を信じていますか」と聞かれて「信じていない」と答え、「私は暗夜の中にいる。そのなかで何とかしてはつきり見極めようと努めているのです」と語ります。タルーは聞きます。「なぜあなた自身はそんなに献身的にやるんですか。神を信じていないといわれるのに」と。リウーは医師として「最も急を要するのは大勢の病人を治してやること」だと言いい、「僕は自分としてできるだけ彼らを守ってやる、ただそれだけです」と答えます。タルーは「あなたの勝利は一時的なものではないか」とタダします。医師はそれを認めながらも「だから

といって戦いをやめる理由にはなりません」と答え、「ではあなたにとってベストが果たしてどういうものになるのか」と聞かれて、

「際限なく続く敗北です」

と答えるのです。

多くの犠牲を出した末に、ベストは突然退潮していきます。それでも市民たちはあわてて喜ぼうとはしなかったといひます。

今日まで過ぎ去った幾月かは、彼らの解放の願いを増大させながらも、一方また用心深さというものを彼らに教え、病疫の近々における終息などますます当てにしないように習慣づけていたのである。

二〇二三年を生きた私たちにもよくわかる心理です。リウーは、最後に結核だった妻の死の知らせを受け取ります。また自分の分身のような友人タルーも流行の最後に感染し、命を落としました。市が解放され、歓喜に沸く町の雲間風を眺めながら、彼は終わったばかりのベストとの戦いの日々を思うのです。

リウーは、一体何を勝負に勝ち得たであろうか？ 彼が勝ち得たところは、ただ、ベストを知ったこと、そしてそれを思い出すということ、友情を知ったこと、そしてそれを思い出すということ、愛情を知り、そしていつの日かそれを思い出すことになるといふことである。ベストと生との賭けにおいて、およそ人間が勝ちうることできたものは、それは a と b であった（宮崎嶺雄訳『ベスト』）。

科学は、膨大な人の命を犠牲にしながらも、ベストという疫病について新しい知識をもたらしました。長年にわたり、感染が息を吹き返すたびごとに、人類は疫病と戦い、これを手なずけるための知識を一步步獲得してきました。医師であるリウーは、こうした科学の進歩に微力ながらも貢献してきた一人です。その一方で、彼はこのバンデミックのなかで愛情を知り、友情を育み、またそれを失う悲しみに出会いました。そうした日々の思い出を生涯の中に残したのです。この思い出は科学ではなく、彼の一度きりの人生のかけがえないものです。

もちろんひとりひとりの人生にとって、家族や友人たちなど現実の存在が生きがいになってくれることは言うまでもありません。そうした個人の一回かぎりの体験や思い出を普遍化し、時や空間を超えて離れた人々とも共通の思い出として表現化されたものが文学であり、歴史であり、芸術であり、宗教なのでしょう。これを味わうことによって個人の体験やその思いが多くの人に共有され、追体験されるのです。これは人間にそれだけのイマジネーション（想像力）があるからなのです。私たちひとりひとりの人生にとって、そうしたものはどうしても必要なものです。

カミュの『ベスト』がフィクションでありながらコロナ禍に心を痛める世界の人々に、ある覚悟と決意を与える作品となりえたのは、そうした普遍性を含んでいたからなのでしょう。カミュはあらためて現代の古典となりました。二十一世紀の教養というものは、こうしたものも含んでいるのだと思います。世界には様々な文学や歴史、芸術、宗教などがあり、私たちひとりひとりの一回限りの生にとって、かけがえない価値をもたらし、生きる指針や勇気を与えてくれたり、癒しをもたらしてくれたたりします。それはカミュの『ベスト』だけではありません。啄木の歌であったり、晶子の詩や歌であっ

たり、ドストエフスキーであったり、親鸞であったりするのでしょう。すぐれた音楽や美術作品、演劇、映画などもそうです。私たちの人生に精神的な豊かさとも深みを与えてくれるこうした人類の共有財産もまた、大切な「教養」と呼ぶに値するものと言えるでしょう。

晩年の立花隆は「知の旅は終わらない」という書物で、死ぬ前にあと二冊書きたい本があると語っています。一冊は若いころからずっと愛読していた詩人の立原道造論、もう一冊は『形而上学』という本です。形而上学とは、思考や直観によって世界の根本原理を追究する哲学の一分野のことですが、彼は、本来形而上学は物理学の上に立つべきものなのに、日本でこれをやる人は物理学をほとんど知らない人ばかりだと言います。そこで自分が現代の物理学の「最先端の知見に立つた『形而上学』」を書き、これを「最後の本に」したいと述べています。

また晩年に収録されたNHKのテレビ番組のドキュメンタリーでは、『歴史』という題の本を最後に書きたいとも語っています。

僕は最後には『歴史』という本を書きたい。その『歴史』という僕の本は、ビッグバンから始まる歴史を全部書きたい。

立原道造論も『形而上学』も『歴史』も結局書かれることはありませんでした。知の総合をめざして関心を広げるだけ広げたような彼も、さすがにこれらを総合するのは容易ではなかったのでしょうか。

あとに残された私たち一人一人が、この書かれざる未完の書を、彼の代わりに頭の中で書き上げていかなばならないのかもしれませんが。本書はささやかなものですが、私なりのその序説と言ってもいいものです。

最後にもう一度J・S・ミルの含テクある言葉をひもといてみたいと思います。今から百五十年前、彼は新人生に向かって、大学で得る教養が何の役に立つのかについて語っています。彼は教養を学ぶことによって、「期待を決して裏切ることのない、利害を超越した報酬」が得られるのだ、といいます。その「報酬」の中身とは、

皆さんが人生を生きていく中で、心惹かれ、もっと知りたいと思うこと（インタレスト）が、より深く、よりバラエティー豊かなものとなること（the deeper and more varied interest you will feel in life）。

「それは、人生を十倍も価値あるものにし、しかも生涯を終えるまで持ち続けることのできる価値です。単に個人的な関心事は年を経るに従ってその価値は減少していきますが、この価値は減少することがないばかりか、増大してやまないものです」と言いました。若き日に学んだ教養は一生続く報酬であり財産なのです。

水谷千秋、教養の人類史 ヒトは何を考えたか？、文春新書

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|---------|------|------|------|------|
| (1) 災ヤク | ① 厄介 | ② 約束 | ③ 薬品 | ④ 役割 |
| (2) 清レン | ① 連続 | ② 悲恋 | ③ 廉価 | ④ 試練 |
| (3) カイ抱 | ① 懐古 | ② 紹介 | ③ 回廊 | ④ 脱会 |
| (4) タダし | ① 正義 | ② 質疑 | ③ 修復 | ④ 改善 |
| (5) 含テク | ① 建築 | ② 畜産 | ③ 駆逐 | ④ 蓄財 |

問二 傍線部A「夢にも思わなかったでしょう」と筆者が考える理由を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 谷崎潤一郎にとって、自分の小説が自らの死後五十五年も経ってから、多くの研究者の目に留まったり、新聞で何度も宣伝されたりして、書店で再び販売されるようになっていたとは理解の及ばないことであるから。
- ② 谷崎潤一郎にとって、自分の小説が自らの死後五十五年を過ぎて起きたコロナ禍のロックダウン中で、ある外国人研究者に再読の機会を与え、その研究者の心の癒しとなったことは想像も及ばないことであるから。
- ③ 谷崎潤一郎にとって、自分の小説がコロナ禍のロックダウンの際に読むべき小説として、世界的に知られたヨーロッパ出身の経済学者から、文学の古典として新聞で紹介されたことは予想できないことであるから。
- ④ 谷崎潤一郎にとって、コロナ禍のロックダウンの中で、日本の人々の心を最も癒した小説が自身の作品の『細雪』であるという海外出身の経済学者の研究報告は、にわかには信じることができない話だったから。

問三 傍線部B「冷静沈着」と類似の意味を持つ四字熟語としてもっとも適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 周章狼狽 ② 勇猛果敢 ③ 泰然自若 ④ 天衣無縫

問四 傍線部C「自分の主張を一貫して守った」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 介抱してくれる宿の女主人をベストに感染させないように、速やかに病院に移動し、そこで医療行為を受けながら独りで人生を終えたこと。
- ② ベストなどの伝染病に感染することの原因には、神に対する不信心があるという考えを持つ人々を説得することに生涯を捧げたこと。
- ③ ベストに感染した人々に対して、医療行為を受ける前に、神に祈りを捧げることによって救われる道を探すことを最後まで説き続けたこと。

- ④ ベストに感染した際、高熱の中で、自身の主義に反した医療や医学の力に頼ることなく、信仰を貫いて独りで死んでいったこと。

問五 傍線部D「二〇二三年を生きた私たちにもよくわかる心理」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① たくさん犠牲者を出す悪性度が著しく高い伝染病による被害が終息しても、その後もその伝染病による被害者は出続け、その中からまた悪性度の高い伝染病が必ず発生するため、人々はその伝染病が根絶されるまでは気を抜いて生活を営むことができない、ということ。
 ② ある時に伝染病の勢いが急に衰えても、人々は病気が蔓延していた時の経験から、病気からの解放を願ってきた一方で、用心深さを刷り込まれてしまっており、伝染病が終息へ向かっている話題を容易には認められない半信半疑の情態になってしまふ、ということ。
 ③ ベストが発生した時からコロナ禍の到来は既に予測されていたものであり、ベストの際に医療従事した人々がコロナ・ウィルスに対して綿密な対策を練ったように、コロナ・ウィルスに従事する人々は次の伝染病への対策を施していることを知っている、ということ。
 ④ コロナ禍のロックダウンにおいて、外国の経済学者が谷崎潤一郎の『細雪』を読んで心の癒しを得たように、ベストの際にはカミュが書いた小説を読むことによって心の癒しを得た人々がいたということは、コロナ禍を経験した私達ならば容易に想像がつく、ということ。

問六 空欄 a、b にあてはまる熟語の組み合わせとしてもつとも適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① a 知識・b 忘却 ② a 記録・b 知識
 ③ a 知識・b 記憶 ④ a 記録・b 忘却

問七 傍線部E「普遍化」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 個人や一部の人々に限られた体験や問題について、誰にでも自分の問題として想定できるようにして提示する、ということ。
 ② 個人や一部の人がしか体験できなかった出来事を、科学の進歩によって誰にでも体験できるように発展させる、ということ。
 ③ 個人にしか適用されることのなかった規則を、できるだけ多くの個人に当てはまるように漸進的に修正をする、ということ。
 ④ 個人の思い出が多くの人々に追体験されることを目的として、文学、歴史、芸術、宗教作品が制作されている、ということ。

問八 傍線部⑦「啄木」、④「晶子」、それぞれの作品として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ⑦ 啄木 ① 雨ニモマケズ ② 一握の砂 ③ 月に吠える ④ 山羊の歌
 ④ 晶子 ① みをつくし ② かるきねたみ ③ みだれ髪 ④ 初恋

問九 傍線部F「期待を決して裏切ることない、利害を超越した報酬」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 自分の人生の中で、おのずと興味が湧き、その興味が多方面に広がっていく、人生をより価値のあるものにしてくれるもので、しかもその価値は人生が終わる時まで持ちつづけることのできる自身で手に入れたかけがえのない価値である、ということ。
 ② 日本では知の統合を目指して関心を広げることが看過されてきたが、思考や直観によって世界の根本原理を追究する哲学の一分野であり、西洋において発展をみた形而上学を学んでいくことにこそ、今後の日本の未来はかかっている、ということ。
 ③ 個人的な関心事は、年齢を重ねれば重ねるほどその価値が減少していくものであるが、形而上学を学ぶことが出来た場合には、世界の根本原理を知ることができるため、むしろ年齢を重ねてからその価値が増大するという逆転現象が起きる、ということ。
 ④ すぐれた音楽や美術作品、演劇、映画などは、私たちの人生に精神的な豊かさや深みを与えてくれる人類の共有財産であるばかりでなく、年を重ねてから触れれば触れるほど、その内容や作者の意図についての純粹で価値のある理解が得られる、ということ。

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

イ 経済学者のブランコ・ミラノヴィッチは、コロナ禍のロックダウンによる外出もままならない不安の中で、谷崎潤一郎の長編小説『細雪』を再読し、登場人物についての日常的な描写に、心の安らぎを得ていた。

ロ カミュは『ベスト』を執筆することによって、ベストという伝染病を詳しく知る作家としてのイメージを与えられたが、多くの人々は作者と小説の名前を知っているだけで、内容についてはほとんど理解していないものが多かった。

ハ 医師のリウーと神父のパヌルーは、ベストが町に蔓延した時にともに協力して患者の介護にあたったが、パヌルーがベストに感染して亡くなるまで宗教的な見解では一致することができなかった。

ニ 晩年の立花隆は「知の旅は終わらない」という書物の中で死ぬ前にと二冊本を書きたいと述べており、一冊は書き上げることができたが、もう一冊については生きている間に書き上げることができず未完の書となってしまった。